



十 エピローグ

「温泉はよかったなあ」

「一仕事した後は、特に、気持ちがええわ」

「体中、汗まみれやったからなあ」

「それでも、踊りすぎて腰が痛いわ」

「腰だけやないわ。わしは手も足も痛いわ」

「わしは、それらに加えて、腹筋も痛いわ」

「お前ら、何、病気の自慢しおうとんや」

「とにかく、これで、子孫たちも少しは思い知ったやろ」

「まあ、当分の間は、お墓参りや盆踊りが続くんじゃないか。でも……」

「そう。でも、だなあ。さっきも言ったけど、喉元過ぎればなんとかで、彼岸、お盆に、正月だけじゃろ」

「まあ、年三回なら許せるんとちゃうか」

「もし、年一回もなかったら？」

「その時は」

「その時じゃ」

「今度は、ゴジラか、ガメラか、キングギドラでも呼び出すか」

「いいや。他の惑星の宇宙人を呼んで、人類の総入れ替えじゃ」

「それじゃあ、わしらとは縁もゆかりもない奴らに地球が乗っ取られるぞ」

「心配せんでも、わしらにも宇宙人の血がまじっとんとちやうか。そうせんかったら、ゾンビなんて呼び出せんやろ」

「そうかもわからんなあ」

「ひょっとして、少しずつ、少しずつ、宇宙人はやって来とったんじゃなかろうか」

「そうやな、人類だけで、こんなに文明が発展するわけがないじゃろ。大転換の節目、節目には宇宙人が必ずからんどったんじゃ」

「それよりも、わしら自身やって、他の惑星の人から見たら宇宙人とちやうか」

「そうや。そうや。ええこと言うわ」

「ついでに言わせてもろたら」

「どこそこの都道府県で生まれたとか、どこの国に生まれたとか」

「皮膚の色が、白いとか、黒いとか、黄色とか」

「金色とか、銀色とか」

「髪の毛を染めとんのとちやうで」

「男とか、女とか、中間とか」

「生まれる前に、自分の意思でなれたらええなあ」

「生まれた後からでも、自分の意思でなりたい方になれるのを認めてやったらええんや」

「大人とか、子どもとかもか」

「大人に生まれて、子どもに育つんもええかもしれんな」

「そんな映画あったなあ」

「でも、大人で生まれたら、おかんの腹を突き破ってしまうで」

「例えばの話や」

「小さな大人もおるやろ」

「一寸法師かいな」

「あれは、生まれたときから大人で、成長しても大人やで」

「子供時代がないのも可哀そうやな」

「お前ら。作り話に何、本気になっとんや」

「わしらかて、子孫たちが想像した作り話とちやうか」

「しっ。黙るとき。ほんまのことがわかったら、わしら消えてしまうで」

「とにかく、なんでも物事は、もっと大きな視野を持って、多角的に見ないかんのと違うか」

「わしの嫁さんも怒ったら、頭に角がようけ生えとったわ」

「そりゃあ、お前の働きが悪いからや」

「ほなけん、今、頑張っとんのや」

「お墓の中に入ってから頑張っても遅いわ」

「いいや。何事にも遅いはないで。やり始めた時が今なんや」

「どこかの塾の講師の受け売りか」

「喧嘩ならいつでも買うたるで」

「墓の中に入ってまで、喧嘩せんでもええやろ」

「とにかく、わしらの小さな希望としては、人はいつか必ず死ぬんやから、死んだ奴の事もたま

には思い出してくれたらええんや」

「そうや。そうや。わしらもお墓の中に入ってから、頑張ってゾンビを生み出したんを忘れとったわ」

「人は忘れる生き物だからな」

「お墓に入ってからもな」

「忘れてもええんや」

「人は忘れることで前に進める」

「でも、たまには、思い出さないと、わやになってしまうで。つい、自分一人で生まれて、自分一人で大きくなったと勘違いしてしまう」

「ほなけん、わしらが見守っとんじゃ」

「あんたのとうちゃんも母ちゃんもあんたも見守っとるで」

「あ痛っ。それを忘れ取った」

「思い出してくれた時でええから、線香やまんじゅうぐらい、お供えしてくれたらええんや」

「ほんまはお酒も欲しいけど」

「あの世は禁酒やで」

「ほなからこの世でお酒をお供えしてもらいたいんや」

「酒をお供えしてくれるのはええけれど。やっぱり、酒の肴にバナナは合わんで」

「ほな、まんじゅうで我慢するか。甘酒まんじゅうもあるで。あの世へ行ってから、すっかり甘党になってしもうたわ」

「でも、まんじゅう食べ過ぎたら、虫歯になるで」

「あほか。もう、わしらは虫歯にもうならんで」

「ええこと思い付いた。まんじゅう怖いと言うとったら。わしらを恐れて、機会あるごとに、お墓にまんじゅうを供えてくれるで」

「そうやな。それなら、みんな一緒に」

「まんじゅう怖い」

「他には？」

「ゾンビよりも」

「ダンスが」

「怖かった」